



本冊子は、文化庁の委託業務として、メディア芸術コンソーシアムJV事務局が実施した2019年度「メディア芸術連携促進事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。

メディア芸術・研究マッピング

マンガ研究の手引き

【研究マッピング】とは

この「研究マッピング」は、「文化庁メディア芸術連携促進事業」（平成27年度～令和元年度）の一環で実施されたプロジェクトです。

「メディア芸術」は、マンガ・アニメ・ゲーム・メディアアートの四分野から構成されていますが、近年それぞれの研究活動が盛んになっています。そこで、各分野の過去の研究成果や最近の動向を整理し、こうした状況に関心を持つ人たちに役立つ「研究を始めるための地図」を作ることになりました。その試みが「研究マッピング」です。

目次

はじめに.....	吉村和真	5
——より良い「マンガ研究の地図」に向けて		
文化庁事業における本プロジェクトの位置付け		5
先行成果に対する本書の位置付け		6
本書のねらいと宛先		7
本書の構成とプロジェクトの実施体制		8
 第1部 総論 マンガ研究の地図		
第1章 日本におけるマンガ研究.....	石川優	12
——初学者のためのブックガイド		
マンガ研究の多層性		12
マンガ研究入門——学問分野と方法論を知る		13
マンガの歴史——戯画・諷刺画からストーリーマンガまで		14
マンガの表現——マンガというコードの追究		15
マンガ文化——マンガ研究の広がり		16
参考文献		17
第2章 日本におけるマンガ研究.....	西原麻里	19
——バラエティ豊かな研究の動向を知るための雑誌		
マンガを研究した論考		19
学術誌『マンガ研究』や日本の学術研究		20
大学などの紀要や私家版の研究雑誌		21
評論・文芸雑誌		21
ムック本		22
参考文献		23
第3章 海外におけるマンガ研究.....	杉本バウエンス・ジェシカ	24
——研究活動の動向		
2010年度以降のマンガ研究の多様化と活性化		24
ヨーロッパにおける学術的なイベントと一般向けのイベント		25
主要な学術雑誌		27
参考文献		27

第2部 各論 社会に広がるマンガ研究

第4章 教育×マンガ研究 竹内美帆 30

——「教育」という枠組みの再考

- 広がるマンガ教育 30
- マンガから考える「教育」 31
- マンガ研究を教育に生かす 32
- マンガ「表現論」と「描く／読む」教育 32
- グローバル化時代のマンガ教育のために 34
- 参考文献 34

第5章 展示×マンガ研究 イトウユウ 36

——「マンガ研究」が〈マンガ展〉に貢献するために／
〈マンガ展〉が「マンガ研究」に貢献するために

- 〈マンガ展〉の増加とその背景 36
- 〈マンガ展〉と「マンガ研究」 37
- 参考文献・ウェブサイト 39

第6章 地域振興×マンガ研究 表智之 40

——地域の視座から捉える作家・作品・ファン

- 「聖地巡礼」とコンテンツツーリズム 40
- 地域社会とファンコミュニティ 41
- 作家を育む地域の歴史・風土 42
- 参考文献 43

第3部 資料

マンガ／コミックス／BDに関する年表 鶴田裕貴 46

キーワード索引 52

はじめに

——より良い「マンガ研究の地図」に向けて

吉村和真

文化庁事業における本プロジェクトの位置付け

この「研究マッピング マンガ領域」プロジェクトは、平成27年度から令和元年度にかけて実施された「文化庁メディア芸術連携促進事業」の一環である。文字通り、国内外で拡大するマンガ研究のこれまでの成果と近年の状況を俯瞰して全体の動向をマッピングし、「マンガ研究とメディア芸術のこれから」の指針となることを目的としている。

背景として、「文化庁メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業」において、平成24年度にスタートし、平成25年度に報告書にまとめられた「マンガ研究マッピング・プロジェクト」がある。こちらに収録されているのは、1990年代以降に発表された主な研究成果のうち、関連の研究領域で引用・参照の頻度が高い著書と論文が中心となっている。その宛先としては、(1) 学生や院生など、マンガ研究を始めようとしている初学者、(2) その研究指導にあたるなど、大学等の授業でマンガ研究を参照しようと考えている教育者、(3) 国外でマンガ研究に従事している研究者、(4) 国外のマンガ／コミックス研究の情報を求める研究者、などが想定されていた。

これに対し、今回のプロジェクトでは、上記の後継事業として、そこで見えてきた可能性や課題を整理するとともに、経年による関連情報の更新を進めてきた。特にマンガ研究は近年、社会展開や国際交流の文脈においてますます広がりを見せており、その方面で活用できる研究テーマや著作、論文などの情報が求められるケースが増えている。そうした事情から今回は、例えば、マンガを活用して地

域振興を図ろうとする自治体の関係者や、小中学校の教育現場にマンガを採用しようとする教員にとって有用な情報など、更に広く社会に展開・貢献できる研究マッピングの構築を目指してきた。

さらに、母体となる事業名が示す通り、「メディア芸術」を構成する他領域との「連携促進」も重視している。例えば、キャラクタービジネスという観点からだけでも、マンガとアニメやゲームとの研究成果を相互参照し、深め合えるテーマは少なくないだろう。こうした協働作業の動機付けや実践に役立つこともイメージしながら、本プロジェクトは遂行されてきた。

先行成果に対する本書の位置付け

ただし、一口に「マンガ研究」とは言うものの、それが意味するところは決して一様でない点には、あらかじめ注意が必要である。それはマンガ研究が、まだ比較的若い学問領域であるという現実とも関係している。

そもそも日本（語）のマンガ研究は、アカデミズムの中で行われる「学術研究」だけでなく（これを「狭義のマンガ研究」と呼ぶ）、様々な媒体で発信される「評論」や「批評」の層が厚い点に特徴がある。むしろ、大学での学術的なマンガ研究が識者に注目され、成果として共有されるのは1990年代後半以降のことである。したがって、日本におけるマンガ研究の言説空間は、「狭義のマンガ研究」を超えた、多様な「マンガをめぐる語り」（以下、「広義のマンガ研究」と呼ぶ）によって形成されてきたと言える。しかし、それらの言説が発表されたのは、時代的にはインターネットの普及以前、しかも雑誌や新聞といった一過性の高いメディアでの掲載が多かったこともあり、体系的な先行成果として蓄積・継承されてきたとは言い難い。

こうした状況下、マンガに関する言説を整理した貴重な先行成果がある。例えば、国内外のマンガ研究の初学者に向けたものとして、細萱敦責任編集、ジャクリーヌ・ベルント監修『日本マンガを知るためのブック・ガイド』（アジアMANGAサミット実行委員会事務局、2002年）、夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）など、近いところでは、マンガ研究とアニメーション研究の文献を網羅的に収集した、竹内オサム監修『マンガ・アニメ文献目録』（日外アソシエーツ、2014年）がある。

加えて、2001年に設立した日本マンガ学会や2006年開館の京都国際マンガ

ミュージアム、2009年開館の明治大学米沢嘉博記念図書館なども、大学での学術的なマンガ研究が世間の注目を集める中で、それを信頼あるものにすべく、研究者間の人的交流や関連資料のアーカイブス、そして、それを通じた体系的な先行研究の整理を目的として、それぞれ運営されてきたことも付言しておきたい。

これらの先行成果をふまえつつ、今回のプロジェクトでは先述した「広義のマンガ研究」を視野に入れることとした。なぜなら、既にインターネットが普及した現在、メディア状況が大きく変化したことによって「マンガの語り口」が多様化した影響もあるが、今回改めて研究マッピングを構築する上で、新たな二つのねらいを設定したからである。

本書のねらいと宛先

そのねらいの一つは、近年のマンガ研究の動向に重点を絞ることである。単純ながら、既存の研究入門書や資料集との差異化を図るべく、直近の研究情報を調査することとした。

具体的には、上記「マンガ研究マッピング・プロジェクト」がまとめられた2016年度以降に、日本語及び英語、フランス語、ドイツ語で発表された学術研究、批評、評伝、インタビュー集、資料集などの情報（主に書籍）を調査対象とし、結果的にこれまで約340件の文献を収集した。その上で、年度ごとに新たに発表された文献の傾向を分析している。

もう一つのねらいは、今回のプロジェクトの社会的有用性を高めるべく、マンガ研究の宛先を拡張することである。こちらについては少し詳しい説明が必要だろう。

本書は、国際的に広がる現在のマンガ／コミックス研究の動向を整理しながら、文字通り、様々な読者にとってわかりやすい「マンガ研究の地図」を描くことを目的としているが、ここで言う「様々な読者」とは、以下の三つに大別できる。第一に、マンガ研究にこれから着手しようとする学生や院生、又はその指導にあたる教員。第二に、特に研究の必要はないけれど、マンガ研究の中身や動向に関心がある人。第三に、仕事や職場などの都合でマンガやマンガ研究の成果を活用したいと考えている人である。そして、この第三の読者層こそが、今回新たに拡張した宛先となる。

日本では近年、マンガを活用しようとする人たちが着実に増えている。例えば、

地域振興や観光資源としてマンガ関連施設やマンガフェスティバルを運営したり、市民啓発などを目的にマンガの展覧会や講演会を実施したりと、行政的な取り組みを担当する自治体関係者。また、2000年代に広がりを見せた大学でのマンガ教育・研究とは別に、総合学習の授業及び図工・美術や国語の教材として、積極的にマンガを取り入れようとする小・中学校の教育関係者。さらには、例えば、患者へのソフトな説明ツールとしてマンガを用いようとする医療従事者のように、娯楽商品ではなく実用向けのマンガの制作や展開に関心を持つ人たち、などである。

こうした社会的ニーズに基づき、マンガの特質や魅力についてもっと深く知りたいと、公務員や教員といった従来のアカデミシャンとは一線を画す人たちが、マンガ研究にアクセスするケースが増えたわけである。そのため、学生や院生などに向けた「入門書」であると同時に、既存のマンガ研究の知見を社会展開するために役立つ、著作名通りの「手引き」となることを本書では心がけている。いわば「研究者になりたい人」だけでなく「研究成果を活用したい人」も宛先に入れることで、これまで以上に社会的有用性の高い、実践的かつ広義の「マンガ研究の地図」を描くことを新たなねらいとしたわけである。

本書の構成とプロジェクトの実施体制

このような位置付けとねらいに基づく本書は、以下の3部構成となっている。各章の執筆者名とあわせて、それぞれの概要を紹介しておこう。

第1部では、総論編として、国内と国外に分け、初学者にとっての手引きとなるよう、マンガ研究とはいかなるものか、その内容や形態をガイドしている。まず、日本の動向について、石川優が書籍を中心に、マンガ研究の入門に役立つ文献を挙げたのち、「歴史」「表現」「文化」という三つの観点から先行研究を紹介する。次に、西原麻里が雑誌やムック本を対象に、評論や批評、インタビューなど、まさに「広義のマンガ研究」を体現する資料について説明。さらに、国外の動向について、杉本バウエンス・ジェシカが近年の関心の広がりを示すべく、英語をはじめフランス語、ドイツ語、スペイン語の研究成果を取り上げる。

これからマンガ研究を始めようとする学生や院生にとっては、いずれも直近の先行研究を知るための有用な情報であり、これらを手掛かりに、自分が知りたいテーマの関連文献や参照データに直接アクセスしてほしい。

第2部では、各論編として、社会的ニーズが高まる近年のマンガ／研究の動向

を三つのキーワードから整理し、実践的なマンガ研究の具体的事例として紹介している。まず、竹内美帆が、マンガ研究と「教育」との組合せについて、2000年代以降の大学教育における広がりを概観したのち、マンガ表現論と美術教育との関係、及びその可能性を論じる。次に、イトウユウが、京都国際マンガミュージアムに勤務する自身の経験もふまえながら、1990年の「手塚治虫展」を画期とした、マンガ研究と「展示」の接合について、実務的かつ本質的な問題提起を行う。そして、表智之が、「地域振興」とマンガ研究との関わりについて、TVアニメ「らき☆すた」と「鷲宮神社」の事例をはじめとする「聖地巡礼」に着目し、経済波及効果やコミュニティへの影響とともに、地方文化又はローカルメディアとしてのマンガが持つ価値を提唱する。

先述したように、教員や公務員などのマンガ研究の新たな宛先を意識して書かれた各論は、近年ますます増加するマンガ／研究の社会的活用を後押ししてくれるだろう。加えて、展示や聖地巡礼がマンガ単体の活用ではなく、アニメやゲームとの抱き合わせによる事例が多いことをふまえれば、三者の記述が「メディア芸術」の「連携促進」を既に実現しているケースの紹介であることも指摘しておきたい。

最後に、資料編となる第3部では、マンガ研究を進める上で有用な資料・データとして、鶴田裕貴がマンガ、コミックス、バンド・デシネ（BD）に関する年表を作成している。「マンガ研究の地図」を一望する上で役立つ仕上がりとなっているので、本論に入る前に、まずはここから、自分が今いる場所や自分の行きたい方向をチェックしてみてもよいだろう。

なお、今回の研究マッピングの成果を可視化・拡張する上では、内容だけでなくメディアとしての機能にも改善の余地がある。成果公開のメディアとしては、やはり文化庁が主宰する「メディア芸術カレントコンテンツ」を予定しているが、画面レイアウトや情報提供の仕組みなど、紙上に比べて融通がきくオンラインサイトの特性を生かした、中期的ビジョンに基づく運用イメージが大切になる。本プロジェクトでは当初からその点をにらみつつ、マンガ研究の最新動向と学術的・社会的ニーズを随時更新できる臨機応変なサイトの在り方を、テーマ別の研究会で検討してきた。その結果は追ってサイト上で公開されるはずなので、本書と併せて御覧いただきたい。

末筆に、今回のプロジェクトの実施体制に触れておきたい。

事業コーディネーターである石川のもと会議を重ねながら、日本語による文献調査を石川と西原が、英語、フランス語、ドイツ語による文献調査を杉本が担当した。プロジェクトの全体統括及び本書の監修は、本文の筆者でもある吉村が務めた。研究会のゲスト並びに本書の執筆に関わられた皆様には、この場を借りてお礼申し上げたい。コアメンバーの4人は全員が大学でマンガの教育と研究に携わる立場だが、それぞれの研究テーマや経歴などは良い意味で距離があり、全体にバランスの取れたチームワークだったと実感している。

とはいえ、もちろん、本書に収録できなかった先行成果や扱えなかった論点も少なくない。また、文献だけでなくネット上の言説も含め、私たちが渉猟できていない範囲も多分に残されている。さらに、国外の情報に関しても、対象とした言語圏は限定されている。それらの課題は今後、可能な限りサイト上でも対応したいと考えているが、いずれにせよ研究成果が世に出る限り、研究マッピングは更新され続けることになる。

その意味で、本書が現時点での有用な「マンガ研究の地図」であってほしいと願うとともに、これを下地として、将来的に新たな研究者たちの手によって、より良い「マンガ研究の地図」が描き継がれることを期待するものである。

第 1 部

総論 マンガ研究の地図

第1章 日本におけるマンガ研究

——初学者のためのブックガイド

石川優

マンガ研究の多層性

本章では、日本語で読むことのできるマンガ研究の文献のうち、初学者が手に取りやすい書籍を紹介する¹。マンガ研究をこれから始めようとしている人に加えて、マンガ研究者ではないけれどその研究について知りたい人にとっても「手引き」となる書籍を案内することが、この章の目的である。

そもそも、日本（語）でのマンガ研究は、様々な言説が交差する多層的な空間として成立している。というのも、日本におけるマンガ研究は学問的な制度の中で行われる学術研究よりも、評論が先行して存在するためである。2001年に日本マンガ学会が設立されたことから伺えるように、日本でマンガの学術研究が活性化するのは1990年代後半以降である。日本（語）のマンガ研究は、様々な学問分野や方法論が関わる学際的な領域であるが（例えば、社会学や心理学、芸術学、文学研究、ジェンダー研究など）、それに加えて（というより、それ以前に）、語りの形式（例えば、学術研究と評論）という点でも多様性を持つと言える。

こうした多層的な言説空間で「迷子」にならないために、マンガ研究では入門書や教科書といった書籍がいくつか出版されている。そこで、この章では「研究入門」、「歴史」、「表現」、「文化」という4つのトピックに沿って、マンガ研究へと一歩を踏み出すための基本的な文献情報を提供したい。研究入門のほかに歴史と表現、文化というトピックに焦点を当てるのは、筆者の専門性によるところが

1 ここではマンガ研究とは、日本および海外のマンガ／コミックスを対象とした学術研究・評論を指す。

大きい。しかし、一方で、これらのトピックに分類される書籍が複数出版されていることも事実である。つまり、本章でのマンガ研究の見取図はある視点（主に人文学的な視点）に基づいて描かれるものではあるが、そこにはマンガ研究の動向がある程度は反映されているはずである。

なお、紙幅の都合上、ここでは資料へのアクセシビリティを優先し、絶版となっていない書籍を中心に選定した。一部には既に絶版となっている書籍も含まれるが、その場合も、所蔵図書館が多いものを選ぶように努めたつもりだ²。

マンガ研究入門——学問分野と方法論を知る

今日の大学では、人文学又は社会科学系の学部・学科を中心に、卒業論文などでマンガを扱いたいという学生が増えている³。そのような学生や指導教員にとって参考になる書籍として、夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）がある（図1）。マンガ研究における主要なトピックの概説だけでなく、参照すべき統計や事典などが紹介されているため、本書を読むことでマンガ研究の大枠を理解することができる。

次に、どのような学問分野と方法論によってマンガが研究されているのかを具体的に知る上では、小山昌宏・玉川博章・小池隆太編著『マンガ研究13講』（水声社、2016年）が参考になる。本書では、「教育」、「歴史」、「文学」といった13のアプローチからマンガが論じられており、マンガ研究の基礎知識とともに方法論的な可能性が示されている。また、ジャクリーヌ・ベルント編『マン美研——マンガの美／学的な次元への接近』（醍醐書房、2002年）には、美学、芸術学、美術史、物語論など、主に人文学系の研究者による論考が収録されている。これらの文献を読めば、マンガ研究が「どのような対象を、どのように考察するのか」という具体的なイメージをつかむことができるだろう。

マンガに関する先行研究の探索には、竹内オサム監



（図1）夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』ミネルヴァ書房、2009年

2 具体的な目安は、全国50館以上の図書館に所蔵がある書籍。所蔵館数の検索結果は、CiNii Books (<https://ci.nii.ac.jp/books/>、最終閲覧日：2019年11月30日）に基づく。

3 詳細は、本書の第4章（竹内）を参照。

修、日外アソシエーツ編『マンガ・アニメ文献目録』（日外アソシエーツ、2014年）を活用するとよい。本書は、1945年から2013年までに発表されたマンガ研究とアニメーション研究の文献情報を幅広く目録化しており、両分野における知の蓄積を示している。特に、同人誌に掲載された評論など、一般にはアーカイブされにくい情報にも目配りしている点が特徴である。なお、評論を実際に読んでみたい場合は、主要な評論を再録した『マンガ批評大系』全5巻（竹内オサム・村上知彦編、平凡社、1989年）が参考になる。近刊としては、思想家の鶴見俊輔によるマンガ評論を取めた『鶴見俊輔全漫画論』1～2（鶴見俊輔著、松田哲夫編、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2018年）も手に取りやすいだろう。

このように、マンガ「研究」のアウトラインを知るための書籍がある一方で、マンガ「そのもの」について概説する書籍も出版されている。以下では、歴史と表現、文化という観点からその主要な文献を紹介したい。

マンガの歴史——戯画・諷刺画からストーリーマンガまで

日本におけるマンガの歴史を概観する入門書は、数多く出版されている。その中でも、吉村和真編、清水勲・秋田孝宏・内記稔夫著『マンガの教科書——マンガの歴史がわかる60話』（臨川書店、2008年）では、明治期の戯画・諷刺画から現代のストーリーマンガに至るまで、日本におけるマンガの歴史が簡潔にまとめられている（図2）。現在では、「マンガ」という語は戦後のストーリーマンガ（複数のページにわたって物語を描くマンガ）を指す場合が多いが、本書はより広い射程で日本マンガ（漫画）の歴史を捉えようとしている。コマ・絵・言葉によるマンガ表現は、時を経て様々に形を変えながら人々に親しまれてきたことがわかる一冊である。



（図2）吉村和真編『マンガの教科書——マンガの歴史がわかる60話』臨川書店、2008年

ストーリーマンガの歴史に焦点を当てたものとしては、松本零士・日高敏編著『漫画大博物館1924-1959』（小学館クリエイティブ、2004年）、竹内オサム監修、小学館漫画賞事務局・小学館クリエイティブ編『現代漫画博物館1945-2005』（小学館、2006年）が参考になる。先に紹介した『マンガの教科書』（前掲）が文章

形式で歴史をたどるのに対して、このシリーズでは主要なマンガ作品がフルカラーの図版とともに紹介されている。戦後以降の作品については後者に、より古い作品については前者に詳しい。また、日本における1コマ漫画（鳥羽絵やポンチ絵など）の歴史については、清水勲による一連の著作が参考になるだろう。

さらに、個々のジャンルの歴史的な展開を記した文献としては、米沢嘉博『戦後少女マンガ史』（新評社、1980年＝ちくま文庫、筑摩書房、2007年）、同『戦後SFマンガ史』（新評社、1980年＝ちくま文庫、筑摩書房、2008年）、同『戦後ギャグマンガ史』（新評社、1981年＝ちくま文庫、筑摩書房、2009年）、同『戦後怪奇マンガ史』（鉄人社、2016年＝鉄人文庫、鉄人社、2019年）がある。また、マンガにおける性表現の歴史については、米沢嘉博『戦後エロマンガ史』（青林工藝舎、2010年）、永山薫『エロマンガ・スタディーズ——「快楽装置」としての漫画入門』（イースト・プレス、2006年＝ちくま文庫、筑摩書房、2014年）、稀見理都『エロマンガ表現史』（太田出版、2017年）が参考になる。

マンガの表現——マンガというコードの追究

マンガ表現の規則と構造を追究する研究は、一般に「マンガ表現論」（以下、表現論）と呼ばれており、日本（語）のマンガ研究において最も活発な分野の一つである。1995年に出版されたムック本『別冊宝島EX マンガの読み方』（宝島社、1995年）を嚆矢として、夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか——その表現と文法』（NTTライブラリー、日本放送出版協会、1997年）や四方田犬彦『漫画原論』（筑摩書房、1994年＝ちくま学芸文庫、筑摩書房、1999年）などの書籍が刊行されてきた。コマとは何か、吹き出しはどのような役割を持つのか、という具合に、マンガを「マンガ」たらしめる表現コードに関心があるならば、表現論の文献を参照するとよいだろう。

上記の文献に加えて、2000年代以降の文化環境をふまえた表現論としては、伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ』（NTT出版、2005年＝星海社新書、講談社、2014年）、鈴木雅雄編『マンガを「見る」という体験——フレーム、キャラクター、モダン・アート』（水声社、2014年）、鈴木雅雄・中田健太郎編『マンガ視覚文化論——見る、聞く、語る』（水声社、2017年）がある（図3）。興味深いことに、1990年代に出版された表現論の文献と比べて、近年の論考ではキャラクターというトピックがより大きく扱われるようになってい



(図3) 鈴木雅雄、中田健太郎編
『マンガ視覚文化論——見る、
聞く、語る』水声社、2017年

る。マンガだけでなく、メディアミックスや二次創作などの現代的な文化事象を考える上で、キャラクターという視点は等閑視できない。その意味でも、キャラクターをめぐる表現論の台頭は注目に値する。

翻訳書についても言及しておく⁴。スコット・マクラウド『マンガ学——マンガによるマンガのためのマンガ理論』（岡田斗司夫監訳、美術出版社、1998年）は、アメリカン・コミックスの作家として活躍する著者が、マンガ形式でマンガ表現について論じた意欲的な著作である⁵。また、ティエリ・グルンステン『マンガのシステム——コマはなぜ物語になるのか』（野田謙介訳、

青土社、2009年）は、フランス語圏のコミックスであるバンド・デシネ（BD）の表現機構を記号論的な見地から考察しており、既存の文化理論（言語学や物語論など）とビジュアルカルチャー研究との接合という点でも学ぶところが多い。

マンガ文化——マンガ研究の広がり

歴史と表現、あるいはその他の論点を含む、「文化」としてのマンガについて総合的に理解を深める上では、呉智英『現代マンガの全体像』（情報センター出版局、1986年＝双葉文庫、双葉社、1997年）や大塚英志・ササキバラ・ゴウ『教養としての〈まんが・アニメ〉』（講談社現代新書、講談社、2001年）が参考になる。また、竹内オサム・西原麻里編著『マンガ文化55のキーワード』（ミネルヴァ書房、2016年）では、マンガ文化をめぐる主要なトピックが簡潔にまとめられている。

さらに、マンガ（文化）研究の潮流の一つとして、少女マンガと女性マンガを扱う研究がある。少女・女性マンガを対象とした研究は、ジェンダー研究やフェミニズム、あるいはクィア・スタディーズを理論的な枠組みとしながら活発に展開されている。例えば、少女マンガをめぐる評論として、藤本由香里『私の居場

4 海外におけるマンガ研究については、第3章（杉本バウエンス）を参照。

5 2020年2月に新訳版が刊行される予定である（スコット・マクラウド『マンガ学——マンガによるマンガのためのマンガ理論 完全新訳版』小田切博監修、椎名ゆかり訳、復刊ドットコム、2020年[予定]）。詳細は、「復刊ドットコム」(https://www.fukkan.com/fk/CartSearchDetail?i_no=68327775、最終閲覧日：2020年1月7日）を参照。

所はどこにあるの？——少女マンガが映す心のかたち』(学陽書房、1998年＝朝日文庫、朝日新聞出版、2008年)がある。また、大城房美編著『女性マンガ研究——欧米・日本・アジアをつなぐMANGA』(青弓社、2015年)では、少女マンガだけでなく、男性同士の関係性を主題とした「ボーイズラブ」などを取り上げながら、マンガというメディアのグローバルな伝播^{でんぱ}とその可能性が論じられている。

そのほかに、商業出版以外の草の根の文化である、同人誌を対象とした研究も存在する。阿島俊『漫画同人誌エトセトラ'82-'98——状況論とレビューで読むおたく史』(久保書店、2004年)やコミケット・コミックマーケット準備会編『コミックマーケット40周年史』(コミケット、2015年)は、体系的なアーカイブが少ない同人誌文化における貴重な記録として読むことができる。

以上からわかるように、マンガ研究の射程とアプローチは実に様々である⁶。この章で取り上げた書籍は、マンガ研究が蓄積してきた成果のごく一部にすぎない。ぜひ実際に文献を手にとって、自分なりの関心領域を見つけてほしい。この「手引き」がマンガ研究の扉を開けるきっかけとなることを願っている。

参考文献

- 阿島俊『漫画同人誌エトセトラ'82-'98——状況論とレビューで読むおたく史』久保書店、2004年
- 伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ』NTT出版、2005年＝星海社新書、講談社、2014年
- 大城房美編著『女性マンガ研究——欧米・日本・アジアをつなぐMANGA』青弓社、2015年
- 大塚英志・ササキバラ・ゴウ『教養としての〈まんが・アニメ〉』講談社現代新書、講談社、2001年
- 稀見理都『エロマンガ表現史』太田出版、2017年
- グルンステン、ティエリ『マンガのシステム——コマはなぜ物語になるのか』野田謙介訳、青土社、2009年
- 呉智英『現代マンガの全体像』情報センター出版局、1986年＝双葉文庫、双葉社、1997年
- 小山昌宏・玉川博章・小池隆太編著『マンガ研究13講』水声社、2016年

6 初学者向けの書籍案内として、『日本マンガを知るためのブック・ガイド』(細萱敦責任編集、ジャクリーヌ・ベルント監修、アジアMANGAサミット実行委員会事務局、2002年)がある。一般販売された書籍ではないため流通と所蔵図書館には限りがあるが、日本語と英語が併記されているため、留学生にも参考になる一冊だろう。

コミケット・コミックマーケット準備会編『コミックマーケット40周年史』コミケット、2015年

鈴木雅雄編『マンガを「見る」という体験——フレーム、キャラクター、モダン・アート』水声社、2014年

鈴木雅雄・中田健太郎編『マンガ視覚文化論——見る、聞く、語る』水声社、2017年

竹内オサム監修、日外アソシエーツ編『マンガ・アニメ文献目録』日外アソシエーツ、2014年

竹内オサム監修、小学館漫画賞事務局・小学館クリエイティブ編『現代漫画博物館1945-2005』小学館、2006年

竹内オサム・西原麻里編著『マンガ文化55のキーワード』ミネルヴァ書房、2016年

竹内オサム・村上知彦編『マンガ批評大系』全5巻、平凡社、1989年

鶴見俊輔著、松田哲夫編『鶴見俊輔全漫画論』1～2、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2018年

永山薫『エロマンガ・スタディーズ——「快楽装置」としての漫画入門』イースト・プレス、2006年＝ちくま文庫、筑摩書房、2014年

夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか——その表現と文法』NTTライブラリー、日本放送出版協会、1997年

夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』ミネルヴァ書房、2009年

『別冊宝島EX マンガの読み方』宝島社、1995年

ベルント、ジャクリーヌ編『マン美研——マンガの美／学的な次元への接近』醍醐書房、2002年

藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？——少女マンガが映す心のかたち』学陽書房、1998年＝朝日文庫、朝日新聞出版、2008年

マクラウド、スコット『マンガ学——マンガによるマンガのためのマンガ理論』岡田斗司夫監訳、美術出版社、1998年

松本零士・日高敏編著『漫画大博物館1924-1959』小学館クリエイティブ、2004年

細萱敦責任編集、ジャクリーヌ・ベルント監修『日本マンガを知るためのブック・ガイド』アジアMANGAサミット実行委員会事務局、2002年

米沢嘉博『戦後少女マンガ史』新評社、1980年＝ちくま文庫、筑摩書房、2007年

同『戦後SFマンガ史』新評社、1980年＝ちくま文庫、筑摩書房、2008年

同『戦後ギャグマンガ史』新評社、1981年＝ちくま文庫、筑摩書房、2009年

同『戦後エロマンガ史』青林工藝舎、2010年

同『戦後怪奇マンガ史』鉄人社、2016年＝鉄人文庫、鉄人社、2019年

吉村和真編、清水勲・秋田孝宏・内記稔夫著『マンガの教科書——マンガの歴史がわかる60話』臨川書店、2008年

四方田犬彦『漫画原論』筑摩書房、1994年＝ちくま学芸文庫、筑摩書房、1999年

第2章 日本におけるマンガ研究

——バラエティ豊かな研究の動向を知るための雑誌

西原麻里

マンガを研究した論考

本章では、図書館等で手に入れることが容易であり、かつ日本のマンガ研究の論文や批評が掲載される代表的な雑誌についていくつか紹介する。

マンガ研究をしてみようと思い立ったら、まずはどのようなところから文献を探せばよいだろうか。前章の書籍もあるが、ある対象やテーマについてピンポイントに知りたいときには、CiNiiなどで検索してヒットした論文や学術誌、書店で購入できる評論誌やムック本の特集などを読むとよいだろう。

マンガを「研究」として論じたもののなかには、マンガ作品、作家、表現、メディア文化、あるいは読者など、マンガに関することそれ自体を研究対象や主題としたものから、主題は別にあり、それを言及する際の事例などでマンガに触れる程度のものまである。本章では前者についての論考を主とした学術誌や雑誌を紹介したい。

またマンガ研究領域には、「問い・主張・論証」という学術的な論文の型にのっとったものと、評論やエッセイ、あるいは報告書というカテゴリーに分けられるものがある。日本のマンガ研究は、大学などに所属しない評論家と大学研究者との相互交流によって現在に至るまで発展してきた。そのため評論誌や一般向け雑誌に掲載されている論考のなかでも、マンガ研究に取り組む上で参照するべきものはいくつもある。そこで本章では、学術誌以外でマンガに関する論考が比較的多く掲載される雑誌やムック本についても挙げていきたい。

学術誌『マンガ研究』や日本の学術研究

マンガ研究に関する論考がまとまっているのが、日本マンガ学会の学会誌『マンガ研究』である¹（図1）。2002年に「第1回大会特集号」として第1号が発行し、2019年現在の第25号までコンスタントに発行を続けている。

『マンガ研究』に掲載される論考のテーマや視点は幅広い。特定の作品の絵（コマ、イラストなど）やキャラクター論、作品の出版過程や背景などに注目したメディア史、作家・評論家の言説と時代背景を関連づけた人物史、またマンガの読み方についての分析やマンガをめぐる社会状況についての考察など、「マンガそのものの研究」から「マンガに関する研究・マンガを用いた研究」まで様々な論考が掲載されている。したがって各執筆者（学会員）が原稿に記す専門分野も多様であり、社会学や文学、美学等のほか、ポピュラーカルチャー研究やジェンダー研究などの学際領域の名称もある。こうしたラインナップから、マンガ研究そのものが学際的なテーマを含有するものであることがわかるだろう。

マンガ／コミックス研究の論文集には、ほかにもジャクリーヌ・ベルントが主となり編集した『国際マンガ研究』（1～5号、京都精華大学国際マンガ研究センター発行）がある。このセンターが開催したシンポジウムなどの発表をもとにした論考が多く、日本語と英語で海外のコミックス研究の成果を読むことができる。京都精華大学国際マンガ研究センターのウェブサイトにて各論考のPDFが公開されている（第4章「教育×マンガ」も参照のこと）。

マンガ研究は学際的領域だが、そのぶん研究の成果はかなり細分化した状況にあると言える。それぞれのディシプリンからマンガを論じた研究の蓄積は進んでいるものの、研究者によって視点やアプローチが異なるため、それぞれの研究の相互参照がし難いのである。学際性の良い部分を持った上で、研究手法の応用や援用ができるような、「マンガ研究」ならではの研究領域の確立が必要である。



（図1）日本マンガ学会編『マンガ研究』25号、日本マンガ学会、2019年

1 日本マンガ学会のウェブサイトより、学会出版物『マンガ研究』のページを参照のこと。http://www.jsscc.net/publish/manga_studies（最終閲覧日：2019年10月18日）

大学などの紀要や私家版の研究雑誌

研究教育機関に所属してマンガ研究を行う研究者が増えた現在、様々な大学の紀要や学会誌にもマンガ研究の論考が多数掲載されている。取り掛かりやすいところとして、CiNii Articles、J-STAGE、magazineplusなどのデータベースで検索すると、マンガを取り扱った研究論文や記事を見つけることができるだろう。大学が発行する学術雑誌は若手研究者にとって貴重な研究発表の場であり、最新の研究の動向を見ることにおいても役立つ。

また、研究者が編纂する雑誌もある。現在最も入手しやすいマンガ研究雑誌が、手塚治虫や児童マンガ研究の第一人者である竹内オサムが1997年に創刊した、児童文化の研究誌『ビランジ』である。2019年現在は44号まで発行しており、発行者に直接申し込めば注文できるほか²、国立国会図書館や京都国際マンガミュージアムなどにも所蔵されている。本誌には国内外の研究者・評論家によるマンガ研究の論考のほか、マンガ家や出版の現場に携わった編集者などのエッセイやインタビューなど、言説史として貴重な情報も掲載されている。またアニメーションや児童文学に関する論考もあり、広くメディア文化の視点からマンガを捉えることができる。

評論・文芸雑誌

査読を通過した、あるいは学術論文の形式に基づいた論考ではないものの、マンガ研究を行う上で参照できるのが評論雑誌や文芸雑誌である。中でも青土社の月刊誌（臨時増刊号あり）『ユリイカ』は、マンガ家やマンガ文化の特集を頻繁に組んでいる³（図2）。この雑誌にはマンガを専門とする研究者だけでなく、評論家や他領域の研究者も寄稿している。学術論文や既刊本の内容をブラッシュアップしたりコンパクトにまとめたりした論考もあるため、バラエティ豊かなアイデアを知ることができる。



(図2) 『ユリイカ：総特集 世界マンガ大系』3月臨時増刊号（第45巻第3号）、青土社、2013年

2 詳細は竹内オサムのウェブサイトより、「ビランジ バックナンバーの紹介」を参照のこと。 <http://www8.plala.or.jp/otakeuch/contents-biran.html>（最終閲覧日：2019年10月18日）

3 詳細は青土社『ユリイカ』一覧を参照のこと。 http://www.seidosha.co.jp/book/index.php?cat_id=10（最終閲覧日：2019年10月18日）

また、KADOKAWAの『ダ・ヴィンチ』もマンガを特集することが多く、作家のインタビューや現在の動向をまとめたエッセイなどが資料として参考になる。そのほか、美術出版社『美術手帖』、新潮社『芸術新潮』などでもマンガに関する記事が掲載されている。フリースタイルの『フリースタイル』といったカルチャー誌やファッション誌でも、マンガ家やマンガ文化を取り上げることがある。一通りの文献を調査したのちに、こうした一般向けの雑誌記事の情報もフォローするとよいだろう。

ムック本

雑誌形態ではないが、マンガ家やマンガジャンルをテーマに掲げたムック本も、マンガ研究の参考文献として重要な役割を担っている。学術的な研究の手續に基づいた論考は必ずしも多くないが、その分野に詳しい者による作品の書誌情報や作家と雑誌の関係など、情報として知っておくべきことが1冊にまとめられている。

例えば河出書房新社の『文藝別冊』シリーズは、石ノ森章太郎やゆうきまさみなどマンガ家を集めたムック本を多数刊行している⁴。マンガ研究者やマンガ家自身が監修した号もあり、論考や作家・関係者のエッセイ、作品の解説、作品目録などが充実している。

また、毎年末に発行される宝島社の『このマンガがすごい!』では、エッセイストや書店員などが選んだ作品のレビューやマンガ家のコメントが掲載されている。こちらは研究色はかなり薄いものの、マンガ文化や出版の動向を知る上で役立つシリーズである。

以上で紹介した雑誌はいずれも、研究の資料として活用しやすいものである。学術論文と同時に評論なども参考文献や資料として検討することで、より深い研究を進めることができるだろう。

4 詳細は河出書房新社『文藝別冊』一覧を参照のこと。http://www.kawade.co.jp/np/search_result.html?cat_id=10（最終閲覧日：2019年10月18日）

参考文献

- 宝島社このマンガがすごい！編集部編『このマンガがすごい！（シリーズ、オンナ版／オトコ版）』宝島社、2005年～（継続中）
- 竹内オサム編『ピランジ：本〈子ども〉文化＋風俗』1号～44号、同志社大学竹内長武研究室、1997年～（継続中）
- 日本マンガ学会編『マンガ研究』1号～25号、日本マンガ学会、2002年～（継続中）
- 『KAWADE夢ムック 文藝別冊（シリーズ）』河出書房新社、1998年～（継続中）
- 『芸術新潮』1巻1号～、新潮社、1950年～（継続中）
- 『ダ・ヴィンチ』1巻1号～、リクルート→KADOKAWA、1994年～（継続中）
- 『美術手帖』通巻600号～、美術出版社、1988年～（継続中）
- 『フリースタイル：talking pop-culture magazine』1号～、フリースタイル、2005年～（継続中）
- ベルント、ジャクリーヌ編『国際マンガ研究1 日本マンガと「日本」：グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』京都精華大学国際マンガ研究センター、2010年
- 同『国際マンガ研究4 世界のコミックスとコミックスの世界：海外の諸コミックス文化を下敷きに』京都精華大学国際マンガ研究センター、2014年
- 同『国際マンガ研究5 マンガにおけるオルタナティブの多面性』京都精華大学国際マンガ研究センター、2015年
- ベルント、ジャクリーヌ・山中千恵・任蕙貞編『国際マンガ研究3 日韓漫画研究』京都精華大学国際マンガ研究センター、2013年
- 『ユリイカ：詩と批評』1巻1号～、青土社、1969年～（継続中）

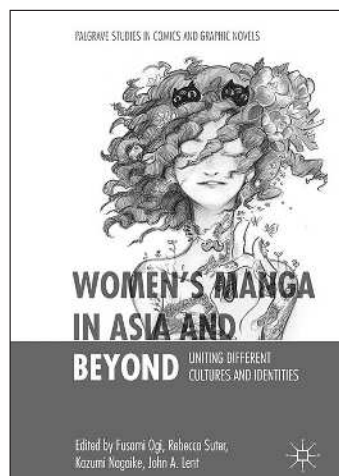
第3章 海外におけるマンガ研究 ——研究活動の動向

杉本バウエンス・ジェシカ

2010年度以降のマンガ研究の多様化と活性化

本章では、大まかに2010年から現在までの海外におけるマンガ研究の動向をまとめながら、学術書や専門雑誌のほか、一般向けのイベントと学術集会に注目する。

まず、1990年代以降の海外における「マンガ」研究は、大きく三つに分けられる。具体的には、日本のマンガ（漫画）研究、英語圏のマンガ（アメリカン・コミックス、略してアメコミ）研究、フランス語圏のマンガ（バンド・デシネ、略してBD）研究である。だが、近年では、多くの研究者が更なる多様性を目指し、まだ研究されていない領域を開拓しつつある。具体的には、よりニッチなジャンルや表現スタイル、あるいはインドや中東といった国・地域のマンガ文化、歴史的又は政治的な抑圧によって歴史から葬られてきた作家などが挙げられる。このような対象に着目した研究が多数発表されることで、従来「マンガ」若しくは「コミックス」として一くくりにされてきた表現形式がより奥深いものであることが裏づけられつつある。



学術書において顕著なのは、このように従来十分に研究されてこなかった地域・ジャンルのマンガ／コミックス文化に着目した研究である。その一つは、大城房美（Fusami Ogi）らによる『Women's Manga in Asia

(図1) Ogi, Fusami, Suter, Rebecca, Nagaike, Kazumi, John A. Lent (eds.) *Women's Manga in Asia and Beyond*. 2019. Palgrave Macmillan.

and Beyond』である（図1）。2019年に出版された本書では、フィリピンをはじめとする東南アジアの少女マンガ文化に着目した論考が収録されている。また、2018年に発表された、ルイズ・アルダーマ（Frederick Luis Aldama）が編者を務めた『Comics Studies Here and Now』では、南米のコミックス文化について言及されており、マンガと地域、人種、植民地化などを関連づけた論考が多い。

そのほかに注目すべき研究として、マンガやコミックスで「真実」を語るノンフィクション・ジャンルの研究がある。ニーナ・ミックウィッツ（Nina Mickwitz）が2016年に上梓した『Documentary Comics』はそういったジャンルを追究しており、世界的なニュースから個人的な経験まで、ビジュアルカルチャーが人々に及ぼす力を裏づける研究となっている。

また、こうした傾向は、現在、あるいはこれから開催されるイベントにも濃厚に見いだすことができる。研究者を対象とした学術集会や教育分野のイベントとは別に、一般のオーディエンス向けのイベントも多様化が進んでいる。2010年以降、フランス・パリのポンピドゥ・センター（Centre Pompidou）をはじめとする美術館・博物館は、日本のマンガ文化の一部に注目する展示を頻繁に開催している。最も話題になったのは、イギリス・ロンドンにある大英博物館（British Museum）における史上最大のマンガ展（The Art of Manga）である。海外の大学・研究機関における「マンガ研究」や「Comics Studies」は、遅くとも2000年代初頭には既に「市民権」を獲得していた。同様に、古典的な絵画や彫刻と肩を並べてマンガ／コミックスが「芸術」、「美術」の表現として見なされるようになったことには、これらの展示に関わった学芸員が大きく貢献している。マンガ展自体は有料であったとはいえ、大英博物館をはじめとするイギリスの主要な美術館・博物館は入場無料であるため、入場者は膨大な数に及ぶ。展示を鑑賞したのはイギリス人だけでなく、海外からの観光客やヨーロッパ各地から訪れた修学旅行の団体なども多い。この展示を鑑賞した人の中から、マンガ研究を志す若者が生まれるかもしれない。

ヨーロッパにおける学術的なイベントと一般向けのイベント

海外におけるマンガ研究の使用言語は英語が大半であり、次いでフランス語が続く。というのも、グローバルな規模では英語が堪能な研究者が多く（それ自体はマンガ研究に限ったことではないが）、特にこの領域では英語圏のコミックスと

BDの存在が重要な「マンガ」として見なされてきたためである。結果的に、従来は英語によるアメリカン・コミックス研究やフランス語によるBD研究、あるいはそれらの言語によるその他のマンガ研究が活発に行われてきた。しかし、既に述べたように、近年では、その他の言語・地域のマンガ研究が盛んになりつつある。そのすべてを述べる余裕はないため、ここでは特にドイツ語圏とスペイン語圏の研究に注目したい。

ドイツやオーストリアでは、この数年、マンガに関する学術的なイベントがしばしば開催されており、その一部は一般聴衆にも開放されている。また、ドイツ語圏の大学ではマンガに関する講義も増えつつある。使用言語は主にドイツ語であるが、一部には英語も含まれており、マンガに描かれるスーパーヒーローやブラジルの社会批評としてのマンガなど、幅広いテーマの授業が開講されている。Comicgesellschaft (<https://www.comicgesellschaft.de>) というウェブサイトでは、ドイツ語圏で発表されているマンガ研究について詳細に記載されている。また、ヨーロッパのコミックスや日本のマンガだけでなく、学際的かつ越境的な、読者にとっても刺激となる文献リストが日々更新されている。

スペイン語は、英語と同様に——スペインという国を除き、スペイン語圏の一部は中米、南半球にあることもあり、経済的格差が存在するとはいえ——グローバルに使用されている言語である。英語による学術的なヘゲモニーを脅かすほどではないとしても、スペイン語圏、ひいては、ポルトガル語やイタリア語などのその他のロマンス諸語によるマンガ研究は多様化しており、興味深い出版やイベントの開催を確認することができる。例えば、バルセロナにある国立のカタルーニャ美術館 (Museo Nacional de Arte de Catalunya) では、2019年10月から2020年6月まで、大規模な手塚治虫展が開催されている。また、スペイン各地や南米の大学でも、学術的なイベントが開催されている。その一部にはマンガだけでなく、マンガとその関連メディア (アニメーション、ゲーム、ライトノベルなど) を包括的なテーマとするものもある。2010年以降、スペイン語によるビジュアルカルチャー研究 (マンガ研究を含む) に関する情報は主にインターネット上に集約されており、TEBEOSFERA (<https://revista.tebeosfera.com/sumario/>) には論文情報が定期的に掲載されている。

主要な学術雑誌

次に、英語圏におけるマンガ研究の査読論文を掲載するジャーナルを紹介したい。『Journal of Graphic Novels and Comics』(Taylor & Francis, 2010年～)は、1年間に2～5回のペースで出版されている(近年、増加傾向にある)。毎号、異なる特集が設定されるが、それ以外のテーマの論文も掲載される。また、『International Journal of Comic Art』(IJOCA)は春と秋の年2回のペースで出版されており、掲載論文のテーマの多様性はほかに類を見ない(1999年～)。『European Comic Art』(2008年～)はIJOCAと同じく年2回出版されるが、掲載論文はヨーロッパのマンガに関連するものに限定されている。そのため、特にBD研究者にとっては重要な雑誌と言えるだろう。全体的な傾向として、近年では印刷物ではなくウェブのみで展開される学術誌が増えつつある。一方、ビジュアルカルチャーや美術をテーマとするジャーナルには、頻繁に「マンガ特集」を組むものも多い。

また、Academia (<https://www.academia.edu>)は、英語やその他の言語で研究結果を発表する研究者(若手研究者を含む)にとって、有益なウェブサイトである。もちろん、一般人もアクセスすることができ、アカウントの作成は無料だ。このウェブサイトでは、研究者がアップロードした論文やエッセイ、書評、未発表草案や講義シラバスなどをPDFファイルとしてダウンロードすることができる。査読されていない(つまり、質が保証されていない)原稿が多いという短所もあるが、若手研究者がマンガ研究のどのような点に関心があるかを発見できるという長所もある。

参考文献

- Aldama, Frederick Luis (ed.). *Comics Studies Here and Now*. 2018. Routledge.
- Mickwitz, Nina. *Documentary Comics*. 2016. Palgrave MacMillan.
- Ogi, Fusami, Suter, Rebecca, Nagaike, Kazumi, John A. Lent (eds.) *Women's Manga in Asia and Beyond*. 2019. Palgrave MacMillan.

第 2 部

各論 社会に広がるマンガ研究

第4章 教育 × マンガ研究

——「教育」という枠組みの再考

竹内美帆

広がるマンガ教育

2000年代以降、マンガに関する学部・学科や科目を有する大学が増加しており、京都精華大学マンガ学部（2006年設立）や東京工芸大学芸術学部マンガ学科（2007年設立）などのマンガ家養成コースだけでなく、明治大学国際日本学部（2008年設立）や学習院大学人文科学研究科身体表象文化学専攻（2008年設立）などの非マンガ家養成課程を含め、現在その数は20近くにもものぼる。また、マンガ専門の学部・学科以外でも特に人文社会学系の科目において「日本文化論」や「メディア論」等の名の下でマンガに関する授業が行われることも珍しくなくなっている。それとともに、小学・中学・高校の教育現場でもマンガを活用する授業も広がっており、従来の教科教育の枠内でどのようにマンガを活用することができるのかについての研究や実践が重ねられている¹。

その背景には、国内外におけるマンガ読者の拡大や日本マンガの国際的評価の定着等「文化としてのマンガ」が認知されるようになったことや、学習者の意欲・関心を惹きつけるメディアとしてマンガを教育に活用しようという需要が高まってきたことが大きい。一方で、一般的な教育現場ではいまだにマンガが「教育外」のものと見なされ、取り上げられるマンガも学習マンガのように既存の学習内容を補助するためのツールとして有用であると認められたものが、学習の邪魔をしない程度に参照することが許されているという現状も見られる。マンガを活用す

1 例えば、国語教育にマンガを活用することの研究に町田（2015）が挙げられる。

る場は増えていても、その方法については現場の人々が試行錯誤をしながら取り組んでいるのが実情であり、そもそも、マンガについての教育とはいったい何を教え、学ぶものなのかという根本的な問題についてそれほど議論が深められておらず、教材としてのマンガ活用についてはいまだ多くの課題を残している。

マンガから考える「教育」

マンガを教育に取り入れることの課題の一つに、従来の教育制度とマンガが齟齬^{そご}を来しやすいことが挙げられる。長年、マンガが美術教育の範囲外と見なされてきたように²、従来の教科教育における教育観や教授法によってマンガを取り上げようとしてもうまくいかない場面が生じてしまうためである。その都度、マンガというメディアの特性への理解からそれにふさわしい新しいやり方を考えることと、既存の制度とのすり合わせが必要となるのである。つまり、マンガを従来の教育制度の中に取り入れようとするれば、その制度自体を見直し捉え直すことが求められるのである。こうして考えれば、マンガを様々な場面において活用する際に求められるのは、マンガをその枠の中に押し込めるよりも、まさにマンガがそうであるような柔軟な態度を持って新しい方法を考え出すことではないか。

「教育」とは必ずしも学校教育に限るわけではなく、美術館教育や生涯学習、広い意味での人間の成長を含めた「教養」といった広い概念としても捉え得る。その意味で、これまでのマンガ研究やマンガ評論においては、教育という言葉に限定されない形でマンガの教育・教養的価値について議論が交わされており、文学や美術と同等に人生を学ぶものとしての役割を持つばかりではなく、その表現力や訴求力という点で人々に対して大きな影響力を持つことを論じたものも多く見られる³。また、マンガ研究は一つの方法論による研究ではなく、マンガそのものやその周辺にある様々な事象を多様な方法・視点から研究するという領域横断的、複合的な研究領域である。マンガをメディア、若しくは文化として捉え、マンガ史、メディア論、産業論、ファンカルチャー論、ジェンダー論など、多様な視点からのマンガに関する研究の蓄積を生かしながら、様々な作品や関連する事象について考える教育も可能である。

2 伊藤（2016）、金澤（2000）参照。

3 代表的なものとして呉（1989）、夏目（2006）など。

マンガ研究を教育に生かす

幅広いジャンルのマンガ研究の知見を俯瞰できる書籍として、清水勲・秋田孝宏・内記稔夫著・吉村和真編『マンガの教科書—マンガの歴史がわかる60話』（臨川書店、2008年）、夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、小山昌宏・玉川博章・小池隆太編『マンガ研究13講』（水声社、2016年）、竹内オサム・西原麻里編著『マンガ文化55のキーワード』（ミネルヴァ書房、2016年）などが挙げられる。また、京都精華大学国際マンガ研究センターが発行する論集『国際マンガ研究』（vol.1-5）は2010年から刊行され、国内外の研究者による多様で批評的な視点からの論文が集められており、国際マンガ研究センターのHPからもダウンロード可能である（図1）。

また、実際に教育現場で活用する際に参照しやすい試みとして、日本財団による「これも学習マンガだ！～世界発見プロジェクト～」⁴がある。このプロジェクトでは、従来の「学習マンガ」のイメージでは捉えられない、エンターテインメントとして楽しまれてきた様々なジャンルのマンガを「文学」「生命と世界」「芸術」など11の項目に分けて200以上のタイトルを紹介している。マンガを通じて、「楽しみながら学ぶこと（＝edutainment）」を継続的に推進していこうという実践である。



（図1）ジャクリーヌ・ベルント編『国際マンガ研究1：世界のコミックスとコミックスの世界—グローバルなマンガ研究を開くために』、京都精華大学国際マンガ研究センター、2010年

マンガ「表現論」と「描く／読む」教育

マンガ教育に携わるものとしては、マンガの特性や表現についての基礎知識に理解を深めることにより、更に活用の幅を広げることができるだろう。マンガの特性については、日本のマンガ研究においては「表現論」という名の下で進められており、海外のコミックス研究でも同様の研究が重ねられている。「表現論」とは、主にマンガの美的側面に関する考察を含む、マンガ表現の固有な仕組みを考察するための手法であり、表現形式を重視する立場として展開されてきたものを

4 <http://gakushumanga.jp/>。選考委員は、選考委員長の里中満智子（マンガ家）をはじめとし、藤本由香里（明治大学国際日本学部教授）、ヤマダトモコ（マンガ研究者／米沢嘉博記念図書館）など。

指す⁵。その初期の代表的な成果である、別冊宝島EX『マンガの読み方』（夏目房之介・竹熊健太郎編、宝島社、1995年）は、様々なマンガ作品の図版を使用しながら「表現論」を網羅的に取り上げ、マンガ表現の多様さが視覚的に伝わってくる仕様となっており、楽しみながら読む中でマンガ表現について考えることができる1冊となっている⁶（図2）。同様に、英語圏の「表現論」と見なせる代表的なものに、マンガ形式で描かれたマンガ論であるスコット・マクラウド『マンガ学』（岡田斗司夫監訳、美術出版社、1998年）がある。そのほか欧米のコミックス研究として先駆的なものとしてウィル・アイズナー『Comics and Sequential Art』（1985）や、フランスのコミックス（BD）研究ではティエリ・グルンステン『マンガのシステム』（野田謙介訳、青土社、2009年）などが挙げられる。

近年の「表現論」としては、伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド ひらかれたマンガ表現論へ』（NTT出版、2005年）以降、三輪健太郎『マンガと映画 コマと時間の理論』（NTT出版、2014年）、鈴木雅雄・中田健太郎編『マンガ視覚文化論 見る、聞く、語る』（水声社、2017年）が挙げられるように、他メディアとの比較を含めた様々な観点からの表現論の深下が進められている。

「表現論」の教育現場への応用は始まったばかりだが、近年アクティブ・ラーニングの観点から注目されるのが、マンガを「描く」とことと「読む」ことを連動させた教育である。これはマンガ家育成教育に限らない。これまで数多くの人々が「描く読者」として、趣味やアマチュア活動を含めてマンガを描く行為を行ってきたことは事実であり⁷、マンガを創る行為には、線描、記号化、コマ割り、模写、ストーリー作りなど、様々な創造活動が含まれる。そうした活動に取り組むこと



（図2）別冊宝島EX『マンガの読み方』宝島社、1995年（現在は購入できません）

5 狭義の意味では、夏目房之介が1990年代に標榜した、マンガ特有の「文法」やそのリテラシーの分析など、視覚的表現形式を優先する立場（夏目、1992）であるが、それ以前の1960年代の石子順造（石子、1967）にもその萌芽が見られる。

6 今改めて「表現論」について考えるためにも重要な一冊であるが、現在絶版のため、入手困難な状態が続いている。

7 マンガ評論家の伊藤剛が監修した「『描く！』マンガ展」（2015年より大分県立美術館ほか全国で巡回）においては、マンガ家と読者との間で、いかにマンガ家と読者たちの間でマンガを描く技術である「画技」が継承されていったかが提示された。

は、手を動かすことによりマンガ表現を探求することのみならず、そこから作品を多角的に「読む（観る）」ことにもつながり、マンガに連なる歴史や文化を自分の体験から考えるきっかけになるだろう。

グローバル化時代のマンガ教育のために

一方で忘れてはならないのが、マンガを読んだことがない、あるいは障害や様々な事情で読むことが困難な読者の存在である。吉村和真・藤澤和子・都留泰作編著『障害のある人たちにに向けた LL マンガへの招待 はたして「マンガはわかりやすい」のか』（樹村房、2018年）では、障害者や高齢者、外国人など、一般的なマンガを読むことが難しい人たちに対する「LL マンガ（読みやすいマンガ）」と呼ばれるマンガを制作するための前提となる議論や方法について取り上げている。グローバル化時代のマンガ教育者として、マンガは「わかりやすいもの」であるという日本人の一般的なマンガ表現に対する認識を相対化する視点を持つことにより、多様な人々のニーズに対応することが可能となるだろう。

マンガがどのようなものであるか、人々はどのようにマンガを「読み／描き」、関わっているかということへの探求を通して、従来の「教育」という枠組みを再考すること——マンガと教育についての実践は、これからの未来を創造するための可能性を秘めているのである。

参考文献

- 石子順造『マンガ芸術論 現代日本人のセンスとユーモアの功罪』富士書院、1967年
伊藤剛「マンガ教育と学校——自由と規範、創造と様式をめぐる逆説」小山昌宏・玉川博章・小池隆太編『マンガ研究13講』水声社、2016年、pp. 16-48.
伊藤剛「一千万人の「描く読者」たちのマンガ表現史へ」『『描く！』マンガ展～名作を生む画技に迫る——描線・コマ・キャラ～』、『描く！』マンガ展企画事務局、2015年、pp. 6-8.
金澤韻「「漫画の描き方」本と美術教育との関係についての一考察——石ノ森章太郎『マンガ家入門』を中心に」『美術教育研究』6号、東京大学美術教育研究会、2000年、pp. 1-18.
呉智英『現代マンガの全体像』情報センター出版局、1986年
小山昌宏・玉川博章・小池隆太編『マンガ研究13講』水声社、2016年
清水勲・秋田孝宏・内記稔夫著、吉村和真編『マンガの教科書—マンガの歴史がわかる60話』臨川書店、2008年
鈴木雅雄・中田健太郎編『マンガ視覚文化論 見る、聞く、語る』水声社、2017年

グルンステン、ティエリ『マンガのシステム コマはなぜ物語になるのか』野田謙介訳、青土社、2009年 (Groensteen, Thierry, *Comics and Narration*, English translation by Anne Miller, University Press of Mississippi, 2013.)

竹内オサム・西原麻里編著『マンガ文化 55 のキーワード』ミネルヴァ書房、2016年

夏目房之介『手塚治虫はどこにいる』筑摩書房、1992年

夏目房之介『マンガに人生を学んで何が悪い?』ランダムハウス講談社、2006年

夏目房之介・竹熊健太郎編、別冊宝島EX『マンガの読み方』宝島社、1995年

夏目房之介・竹内オサム編『マンガ学入門』ミネルヴァ書房、2009年

ベルント、ジャクリーヌ編『国際マンガ研究』vol.1-5、京都精華大学国際マンガ研究センター、2010-2015年 (<http://imrc.jp/lecture/2009/12/comics-in-the-world.html> などからダウンロード可能)

マクラウド、スコット『マンガ学』岡田斗司夫監訳、美術出版社、1998年 (McCloud, Scott. *Understanding Comics: The Invisible Art*, Kitchen Sink Press, 1993. New York: Harper Collins, 1994.)

町田守弘『「サブカル×国語」で読解力を育む』岩波書店、2015年

三輪健太郎『マンガと映画 コマと時間の理論』NTT出版、2014年

吉村和真・藤澤和子・都留泰作編著『障害のある人たちに向けた LLマンガへの招待 はたして「マンガはわかりやすい」のか』樹村房、2018年

第5章 展示×マンガ研究

——「マンガ研究」が〈マンガ展〉に貢献するために／
〈マンガ展〉が「マンガ研究」に貢献するために

イトウユウ

〈マンガ展〉の増加とその背景

近年、一般の美術館・博物館やデパートの催事場といった場所で開催される展覧会として、マンガをテーマにした展覧会——〈マンガ展〉が急増している。

1980年代にはデパートなどでしばしば行われていた大型展覧会に比べ、制作費がかなり抑えられるという事情もあるが、より大きな社会的・文化的な背景も存在する。一言で言えば、マンガ文化そのものが、社会の中で〈公的なもの〉として扱われるようになったのである。

一つのきっかけは、1989年にマンガ家の手塚治虫が亡くなったことだと筆者は考えている。再評価される契機を得た手塚作品は、様々なメディアを通して、マンガファン以外の人たちの目に触れるようになっていく。ハードカバーマンガ本は、手塚が晩年に実験した新しい「マンガメディア」だと言えるが、手塚の死後、彼の作品を復刻する形で急速に一般化することで、書店におけるマンガコーナー以外の文芸棚や、公共図書館・学校図書館など、それまでマンガになじみのなかったところにも居場所を作っていった。1990年に東京国立近代美術館で開催された「手塚治虫展」は、国立のミュージアムでは初となったマンガ家の個展だが、展覧会という空間が、マンガ作品と読者をつなぐ「メディア」になり得ることを社会的に知らせ、現在も続くマンガ展の一つの型を作った（図1）。

2000年前後には、欧米における日本マンガ人気を一つの背景に、国が、マンガを、文化政策の対象と見なすようになり、加速度的に〈公的な文化〉としての社会的な地位を確保していくことになった。こうした状況によって、公立の美術館・

博物館やその他の公的文化施設は、企画展のテーマとしてマンガを取り上げやすくなっている。行政サービスの向上が期待された公立ミュージアムの独立行政法人化は、ポピュラーな人気を得たマンガ作品を取り上げることを加速させた。

一方、続く出版不況の中、マンガ出版社は、マンガ作品を、「本」という形以外のメディアで多角的に展開するようになった。マンガ展は、そうした二次使用の重要な一

角を占めつつあると言える。人気の作家や作品が取り上げられたマンガ展を、一種のファンサービスの場として用意し、そこで、会場限定グッズやサイン会などのイベントも提供している。



(図1) ストーリーマンガ家としては初めて国立の美術館で開催された「手塚治虫展」(於・東京国立近代美術館、1990年)のカタログ

〈マンガ展〉と「マンガ研究」

展覧会が成立するためには、「展示素材」が必要である。

ここで言う「展示素材」とはもちろん、展示物そのものを含むが、マンガ展の場合、それだけが「展示素材」と見なされていることが少なくない。極端な言い方をすれば、現在の日本のマンガ展のほとんどは、マンガの原稿（原画）を額装し、壁に並べただけの空間を提供しているにすぎない。それは、一般の美術館・博物館における多くのマンガ展でも同じである。

こうした状況を引き起こしている原因は、一言で言えば、マンガ展作成の過程に、「マンガ研究」の要素が必要であるという認識が低いからだ。

美術館・博物館などで開催されている一般的な展覧会において、展示素材はふつう、展示物そのものだけでなく、それら展示物に関する研究の知見を含んでいる。展示会場に貼付されている解説パネルのテキストや、展示構成そのものが、「研究者」としての学芸員の「解釈」として「表現」されているのである。現状の多くのマンガ展には、「マンガ研究」による「解釈」が希薄であると言わざるを得ない。もっとも、そうした「解釈」が表現されたマンガ展も存在する。ここでは、充実した図録が参考になる、近年のマンガ展を二つだけ紹介しておきたい。「読者」が「作者」になっていくシステム——投稿マンガ誌や同人誌即売会、「pixiv」



(図2)「描く読者」という展示コンセプト自体がマンガ研究としての主張を持っていた「『描く!』マンガ展」(於・大分県立美術館、2015年)

のような投稿サイトなど——の豊かさこそを日本のマンガ文化の特徴と考え、その歴史をひもといた「『描く!』マンガ展～名作を生む画技に迫る―描線・コマ・キャラ～」(大分県立美術館、2015年)(図2)、マンガを含めた大衆文化史と美術史の制度的な垣根をいったん取り払い、その中で、戦中・戦後の日本文化そのものを問い直そうとした「Oh! マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー」(兵庫県立美術館、2019

年)。いずれも、綿密で厚い事前の調査・研究と、キュレイターの「解釈」がはっきり表現された展覧会だった。

しかしながら、より充実したマンガ展が作られていくためには、従来のマンガ研究の知見を参照した「展示素材」が用意されるだけでは足りない。そうしてできたマンガ展そのものを分析する「マンガ展研究」という分野の成立こそが急務である。これは、既に成立している「展覧会評」をそのままマンガ展に当てはめればいいということではないだろう。従来美術館・博物館が取り扱っていたファインアートや史資料と、マンガ資料は、本質的に異なる要素がいくつか存在しているからだ(図3)。この問題に関しては、表智之・金沢韻・村田麻里子『マンガとミュージアムが会うとき』や、石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編著『ポピュラー文化ミュージアム』が、マンガを含めたポピュラー文化を展示するということの意味そのものを考えていて、参考になる。また、マンガミュージアム研究会によるウェブサイト「マンガ展のしくみ」は、マンガ展の展示手法を複数の視点から解析し、「マンガ展評」の実例も掲載している。

最後に、マンガ資料のアーカイブについて書いておきたい。先の書き方では、あたかも、マンガ素材そのものは存在しているかのように読めたかもしれないが、そのようなことは決してない。マンガ本やマンガ



(図3) 原画を踏みながら鑑賞することで「原画の価値とは何か」と考えさせた「土田世紀原画展——43年、18,000枚。」(於・京都国際マンガミュージアム、2014年)

原画は、これまで、そして今現在も、どんどん失われていっている文化資源だ。マンガ展の素材である前に「マンガ研究」の対象そのものでもあるマンガ本・マンガ原画を、どのように収集し、どのように整理・保存し、共有していくかという「マンガアーカイブ」に関する議論にはもちろん、マンガ研究者も積極的に関わっていくべきであろう。

参考文献・ウェブサイト

- 石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編著『ポピュラー文化ミュージアム 文化の収集・共有・消費』ミネルヴァ書房、2013年
- 伊藤遊「マンガミュージアム マンガ文化の普及と保存」竹内オサム、西原麻里編著『マンガ文化55のキーワード』ミネルヴァ書房、2016年
- 伊藤遊「「マンガ展」における展示手法の類型化——展示手法共有のためのツール開発に向けて」『京都精華大学国際マンガ研究センター年次報告書 2017年度』京都精華大学国際マンガ研究センター、2018年
- 伊藤遊・谷川竜一・村田麻里子・山中千恵『マンガミュージアムへ行こう』岩波書店、2014年
- 表智之・金沢韻・村田麻里子『マンガとミュージアムが会うとき』臨川書店、2009年
- マンガミュージアム研究会「マンガ展のしくみ」<https://mangaten-shikumi.com>

第6章 地域振興 × マンガ研究

——地域の視座から捉える作家・作品・ファン

表智之

「聖地巡礼」とコンテンツツーリズム

近年、アニメやマンガの舞台となった場所にファンが訪れることを「聖地巡礼」と呼ぶ。制作者は作品をファンに継続的に楽しんでもらうため、地元は観光客誘致と経済活性化のため、「聖地巡礼」を意図的に仕掛ける例も少なくない。

ファン活動としての舞台探訪自体は以前からあり、オフサイド・ブックス編集部『マンガの歩き方』（彩流社、1999年）に詳しい（図1）。「コミックマーケット」や「コミティア」など同人誌即売会の過去のカatalogをたどれば、ファン活動を同人誌にまとめた例も見受けられよう¹。そして、小説や映画・TVドラマなど他のメディアでも同じ現象はあるし、海外にもあるわけで、それら諸々を広く捉えた総称としては「コンテンツツーリズム」と呼称する。

様々なコンテンツツーリズムの中でアニメ・マンガの「聖地巡礼」が殊更に注目されたのは、TVアニメ「らき☆すた」（原作・美水かがみ、制作・京都アニメーション、2007年放映）の例によるところが大きい。作中に登場する神社のモ



（図1）オフサイド・ブックス編集部・編『マンガの歩き方』（彩流社、1999年）表紙。使用されているのは、はるき悦巳「じゃりん子チエ」と、物語の舞台となった大阪の実景写真。

1 いずれも明治大学米沢嘉博記念図書館で閲覧可能。

デル「鷲宮神社」(埼玉県久喜市)に大勢のファンが足しげく通い、それまで9万人前後だった初詣の参拝客が45万人以上に急増したというのだ(山村高淑『アニメ・マンガで地域振興』東京法令出版、2011年)。この数字のインパクトは絶大であった。

それゆえ「聖地巡礼」に関する研究は、経済波及効果の分析など、地域振興の方法論研究の色彩が濃い。山村高淑の前掲書のほか、岡本健『アニメ聖地巡礼の観光社会学——コンテンツツーリズムのメディア・コミュニケーション分析』(法律文化社、2018年)や、増淵敏之『ローカルコンテンツと地域再生——観光創出から産業振興へ』(水曜社、2018年)などがあり、また専門の学会もある。

地域社会とファンコミュニティ

「聖地巡礼」に見られるコミュニティ志向も注目すべきところだ。2006年「ニコニコ動画」開設、2007年「iPhone」発売、2008年「Twitter」「Facebook」日本語版運用開始と、ネットを介したビジュアルなコミュニケーションは2000年代後半に急速に精細かつポータブルなものとなった。趣味嗜好^{しこう}を共有するもの同士が緊密に結びつきやすいSNSの特徴を考え合わせれば、「聖地巡礼」の動機の中に、ファンコミュニティの中で存在感を発揮し認められたいという承認欲求があることは容易に見て取れる。

ファンたちのコミュニティ志向は、いくつかの「聖地」の現場においても発揮された。前述の「らき☆すた」においては、鷲宮神社にファンが通ううちに地元住民との密な交流が生まれ、キャラクターをあしらってファンが自作した神輿^{みこし}が神社の例祭に参加するほどに、地域コミュニティにファンたちが溶け込んでいる。このあたりは社会学や民俗学の視点からの研究対象でもある。

2010年代には、「艦隊これくしょん」「刀剣乱舞」など「擬人化もの」(軍艦や刀剣などが個々に持つ来歴や特性を反映して造形された美少女・美少年キャラクターの展開)の「聖地巡礼」が積極的に仕掛けられた例が目立つ(図2)。興味深いのは、キャラクターのモ



(図2) アニメツーリズム協会公式『アニメ聖地88Walker』(KADOKAWA、2018年)表紙。『艦隊これくしょん』ゆかりの五つの港町を特集で取り上げている。

デルが背負う来歴（軍艦の戦歴や刀剣の旧蔵者のエピソード）を契機に、地域の歴史・風土への知的関心の喚起がファンにおいて見られることである。

作家を育む地域の歴史・風土

マンガは主に出版物として発表され、出版・流通ともに首都圏に一極集中しがちなせいか、作家や作品を地域の歴史・風土と関連させて考察する研究は多くない。しかし例えば手塚治虫の作家性を考えるとき、彼が育った兵庫県宝塚市の風土、緑あふれる田園地帯でありつつ宝塚歌劇などエンターテインメント体験に恵まれた町であったことは、重要なヒントになるだろう。それに日本のマンガには矢口高雄の「釣りキチ三平」(図3) など数多くの「地方もの」があり、一種のジャンルとして確立している。作家や作品に関わる地域の歴史・風土について理解を深めるところから開ける、マンガ研究の新たな視点があるはずだ。

加えて、首都圏発ではないローカルなマンガメディアも実はあり、マンガ史を動かす偉大な才能がローカルメディアから現れた例は少なくない。駄菓子屋や露店で流通した「赤本」で手塚治虫が頭角を現し、ピーク時には全国で3万軒を数えたという「貸本屋」向けの単行本や雑誌からは、さいとう・たかをが生まれた。大学生など若者が手作りの雑誌を手売りする「ミニコミ」からは、いしいひさいちが生まれ、85年の「コミックマーケット」発足に刺激されて全国各地に生まれた「同人誌即売会」の会場にはCLAMPがいたのである。

作家が何を学び、どんな場で研鑽^{けんさん}を積んで、才能を開花させたか。「郷土史家」が手掛けるような地道な調査の積み重ねになろうが、マンガの作家・作品について「地域」との結びつきで考えるべきテーマは多い。やや表層に流れることも多い現在の「聖地巡礼」も、地域の視点からの新たなマンガ研究に根差すことで、より重層的で豊かなものとなるはずである²。



(図3) 秋田県横手市の観光キャラクターを務める「釣りキチ三平」(矢口高雄)。2019年2月3日、JR東日本・奥羽本線「横手」駅にて筆者撮影。

2 拙稿『『地域』からのマンガ研究』も参照（『歴博』188号掲載、国立歴史民俗博物館、2015年）。

参考文献

アニメツーリズム協会公式『アニメ聖地88Walker』KADOKAWA、2018年

岡本健『アニメ聖地巡礼の観光社会学——コンテンツツーリズムのメディア・コミュニケーション分析』法律文化社、2018年

オフサイド・ブックス編集部『マンガの歩き方』彩流社、1999年

表智之「『地域』からのマンガ研究」『歴博』188号、国立歴史民俗博物館、2015年

増淵敏之『ローカルコンテンツと地域再生——観光創出から産業振興へ』水曜社、2018年

山村高淑『アニメ・マンガで地域振興』東京法令出版、2011年

第 3 部

資料

マンガ／コミックス／BDに関する年表

鶴田裕貴

年		マンガ／コミックス／BDに関する主な出来事	
西暦	元号	日本	欧米
1812	文化9年		イギリス／トーマス・ローランドソン画、ウィリアム・クーム文の連作版画『シンタックス博士のピクチャレスクを探す旅』発表。
1814	文化11年	葛飾北斎『北斎漫画』最初の一編が発表。	
1830	文政13年／ 天保元年		フランス／シャルル・フィリポンらにより『カリカチュール』創刊。
1832	天保3年		フランス／フィリポンらにより『シャリバリ』創刊。
1833	天保4年		スイス／ロドルフ・テプフェール、最初の版画文学作品『ジャボ氏物語』を自費出版。
1841	天保12年		イギリス／ヘンリー・メイヒューらにより『パンチ』創刊。
1845	弘化2年		ドイツ／カスパー・ブラウンらにより『フリーゲンデ・ブレッター』創刊。 スイス／テプフェール『観相学試論』発表。
1862	文久2年	チャールズ・ワグマン、横浜居留地にて『ジャパン・パンチ』創刊。	
1865	元治2年／ 慶応元年		ドイツ／ヴィルヘルム・ブッシュ、絵本『マックスとモーリッツ』を発表。

西暦	元号	日本	欧米
1874	明治7年	河鍋曉斎、仮名垣魯文らにより『絵新聞日本地』創刊。	
1877	明治10年	野村文夫らにより『團團珍聞』創刊。	アメリカ／ジョセフ・ケプラーらにより『パック』英語版創刊（ドイツ語版は1876年）。
1894	明治27年		アメリカ／『ニューヨーク・ワールド』紙の日曜版にカラー印刷コミック付録が創設。
1896	明治29年		アメリカ／『ニューヨーク・ワールド』紙にてリチャード・F・アウトコールド「ホーガンズ・アレイ」（イエロー・キッド）が週刊連載として確立（初出は1895年）。
1901	明治34年	宮武外骨らにより『滑稽新聞』創刊。	
1905	明治38年	北澤楽天らにより『東京パック』創刊。	アメリカ／『ニューヨーク・ヘラルド』紙にてウィンザー・マッケイ「夢の国のリトル・ニモ」連載開始。
1907	明治40年		アメリカ／『サンフランシスコ・クロニクル』紙にて、バド・フィッシャー「A. マット」連載開始（のちに「マットとジェフ」に改題）。
1918	大正7年	北澤楽天らにより、漫画好楽会創立。	
1921	大正10年	時事新報社『時事新報』の日曜版として『時事漫画』が独立。	
1925	大正14年		フランス／『エクセルシオール』紙の付録「ディマンシェ・イリュストレ」にてアラン・サン＝トガン「ジグとピュス」初掲載。

西暦	元号	日本	欧米
1929	昭和4年		アメリカ／エドガー・R・バローズ原作、ハル・フォスター画「ターザン」 ユナイテッド・フィーチャーズ・シンジケートより配給開始。 フィリップ・F・ノーラン原作、ディック・カルキンス画「25世紀のバック・ロジャーズ」 ジョン・F・ダイル社より配給開始。 ベルギー／『20世紀新聞』(Le Vingtième Siècle)の付録に「タンタンの冒険」が初掲載。
1930	昭和5年		アメリカ／アブ・アイワークス画のコミック・ストリップ「ミッキー・マウス」 キング・フィーチャーズ・シンジケートより配給開始。 チック・ヤング「ブロンディ」 同シンジケートより配給開始。
1931	昭和6年	大日本雄辯會講談社『少年倶楽部』にて田河水泡「のらくろ」(初回は「のらくろ二等卒」)連載開始。	
1937	昭和12年		アメリカ／ナショナル・アライド出版から『ディテクティブ・コミック』創刊。別会社としてディテクティブ・コミックス (DC) 社が創立。
1938	昭和13年	内務省「児童読物改善ニ関スル指示要綱」を通達。	アメリカ／DC社『アクション・コミックス』創刊。同誌第1号にジェリー・シーゲル原作、ジョー・シャスター画「スーパーマン」が掲載。 フランス・ベルギー／デュピュイ社『スピルー』創刊。
1939	昭和14年		アメリカ／タイムリー・コミックス社創立 (のちのマーベル・コミックス)。

西暦	元号	日本	欧米
1940	昭和15年	新日本漫画家協会創立、同協会により「翼賛一家」が創作される。	
1947	昭和22年	手塚治虫、酒井七馬『新寶島』発表。 学童社『漫画少年』創刊。	
1949	昭和24年		フランス／コミックスを含めたアメリカの表現物を規制する法案が可決。
1950	昭和25年	明々社（のち少年画報社）『少年画報』（前身は48年創刊の『冒険活劇文庫』）創刊。	
1952	昭和27年		アメリカ／EC社『マッド』創刊。
1953	昭和28年	手塚治虫、トキワ荘入居。	
1954	昭和29年	文藝春秋新社『文藝春秋臨時増刊 漫画読本』創刊。	アメリカ／心理学者フレデリック・ワースム『無垢の誘惑』（Seduction of the Innocent）出版。 コミックス倫理規定委員会（Comics Code Authority）創立。
1955	昭和30年	悪書追放運動が激化。焚書を含めたバッシングが行われる。	
1959	昭和34年	講談社『週刊少年マガジン』、小学館『週刊少年サンデー』創刊。 辰巳ヨシヒロらによって「劇画工房」結成。	フランス／エディプレスーエディフランス社『ピロット』創刊。
1960	昭和35年		フランス／『ハラキリ』創刊。
1962	昭和37年		フランス／フランシス・ラカサンらにより、バンド・デシネ・クラブ（Le club des bandes dessinées）創立。

西暦	元号	日本	欧米
1963	昭和38年	講談社『週刊少女フレンド』（74年より月2回刊、91年より『月刊少女フレンド』）、集英社『週刊マーガレット』（88年より『マーガレット』として月2回刊）創刊。 出版倫理協議会創立。	
1964	昭和39年	青林堂『月刊漫画ガロ』創刊。	フランス／描画文学研究及び調査協会 (Société civile d'étude et de recherche des littératures dessinées, 略称SOCERLID) 創立。
1967	昭和42年	虫プロ商事『COM』、双葉社『週刊漫画アクション』、少年画報社『ヤングコミック』創刊。	
1968	昭和43年	小学館『ビッグコミック』、集英社『少年ジャンプ』創刊（69年から『週刊少年ジャンプ』）。	アメリカ／アンダーグラウンド・コミック誌が相次いで創刊。『フェズ・‘N’・ヘッズ』、『ザップ』、『ビジュ・ファニーズ』など。
1970	昭和45年	竹宮恵子と萩尾望都が大泉サロンにて同居し始める。	
1973	昭和48年	ベストセラーズ『漫画エロトピア』創刊（創刊当時は『漫画ベストセラー』）。	
1974	昭和49年	白泉社『花とゆめ』創刊。	
1975	昭和50年	「コミックマーケット」第1回開催。	フランス／ユマノイド・アソシエ社『メタル・ユルラン』創刊。
1976	昭和51年		アメリカ／ファンタグラフィックス社創立。
1980	昭和55年	集英社『YOU』創刊（当時は『月刊セブンティーン』増刊として創刊）。	アメリカ／アート・スピーゲルマンらにより『RAW』創刊。
1983	昭和58年	中森明夫が『漫画ブリッコ』に掲載したコラムにて「おたく」という言葉を初めて用いる。	

西暦	元号	日本	欧米
1986	昭和61年		アメリカ／DC社『ウォッチメン』、『バットマン：ダークナイト・リターンズ』それぞれ第1巻が発行。
1989	昭和64年／平成元年	手塚治虫死去。	
1990	平成2年	東京国立近代美術館にて「手塚治虫展」開催。	フランス／ラソシアシオン社創立。
1992	平成4年		アメリカ／アート・スピーゲルマン『マウス』がグラフィック・ノベルとして初のピューリッツァー賞を受賞。 イメージ・コミックス社創立。
1993	平成5年		アメリカ／スコット・マクラウド『マンガ学』(Understanding Comics)発表。
1995	平成7年	『週刊少年ジャンプ』発行部数653万部に到達。 増田まんが美術館開館。 宝島社より『別冊宝島EX マンガの読み方』発行。	
2001	平成13年	日本マンガ学会創立。	
2005	平成17年	伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド』出版。	
2006	平成18年	京都精華大学マンガ学部設置。 京都国際マンガミュージアム開館。	

参考図書

清水勲『年表 日本漫画史』臨川書店、2007年。

David Kunzle, *The History of the Comic Strip: The Nineteenth Century*, Oakland: University of California Press, 1990.

Maurice Horn, *The World Encyclopedia of Comics*, Delaware: Chelsea House Publishers, 1998(Comprehensive Edition).

キーワード索引

人物、事物、出来事など

アーカイブ 7, 14, 17, 38, 39
赤本 42
アクティブ・ラーニング 33
アニメーション（アニメ） 6, 9, 14, 16, 21, 26, 40, 41
アメリカン・コミックス（アメコミ） 16, 24, 26
LLマンガ 34
学習マンガ 30, 32
貸本 42
キャラクター 6, 15, 16, 20, 41
ゲーム 6, 9, 26
コミックマーケット 17, 40, 42, 50
コミティア 40
コンテンツツーリズム 40, 41
児童文化 21
少女マンガ 15, 16, 17, 25
聖地巡礼 9, 40, 41, 42
地域振興 5, 8, 9, 40, 41
手塚治虫 9, 21, 26, 36, 42, 49, 50, 51
展覧会 8, 36, 37, 38
同人誌 14, 17, 37, 40, 42
鳥羽絵 15
二次創作 16
バンド・デシネ（BD） 9, 16, 24, 26, 27, 33, 49
ビジュアルカルチャー 16, 25, 26, 27
評論 6, 8, 12, 14, 16, 19, 20, 21, 22, 31

ファン 31, 36, 37, 40, 41, 42
編集者 21
ボーイズラブ（BL） 17
ポピュラーカルチャー（ポピュラー文化） 20, 38
ボンチ絵 15
マンガ家 21, 22, 30, 33, 36
ミュージアム 7, 9, 21, 36, 37, 38, 51
メディアミックス 16
ライトノベル 26

研究領域、方法論

記号論 16
クィア・スタディーズ 16
産業論 31
社会学 12, 20, 41
ジェンダー研究（ジェンダー論） 12, 16, 20, 31
心理学 12, 49
美学 13, 20
美術史 13, 38
芸術学 12, 13
表現論 9, 15, 16, 32, 33
フェミニズム 16
文学研究（文学） 12, 13, 20, 21, 31, 32, 46, 50
マンガ史 15, 31, 42
メディア論 30, 31
物語論 13, 16

著者略歴（五十音順）

石川優（いしかわ ゆう）

専門はマンガ研究、ファン文化研究、文学理論。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了、博士（文学）。現在、大阪市立大学大学院文学研究科特任助教、文化庁メディア芸術連携促進事業コーディネーター。主な業績として、「『やおい』における物語の生成——物語世界と筋という視点から」（『マンガ研究』第23号、2017年、29-48ページ）などがある。商業出版以外のマンガ表現に関心があり、同人誌やSNSを観察する日々。

イトウユウ（いとう ゆう）

専門はマンガ研究、民俗学。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、京都精華大学国際マンガ研究センター研究員。京都国際マンガミュージアム等における多くの展覧会のキュレーションを担当。主な出版業績としては『マンガミュージアムへ行こう』（共著、岩波書店、2016年）などがある。また、「マンガミュージアム研究会」として、ウェブサイト「マンガ展のしくみ」（<https://mangaten-shikumi.com/>）を運営している。小学生の時に水木しげる作品に出会い、マンガの奥深さと、民俗学という学問があることを知る。

表智之（おもて ともゆき）

専門は思想史・マンガ研究。大阪大学大学院文学研究科博士課程（後期）修了、博士（文学）。京都国際マンガミュージアムの設立に参加した後、北九州市漫画ミュージアムの開館に携わり、現在、同館専門研究員。畑中純「まんだら屋の良太」や、たーし「ドンケツ」を座右に、光と影が交錯する街の歴史の面白さをどう伝えるべきか思案する日々。2018年度から「文化庁メディア芸術祭」マンガ部門審査委員も務める。主な業績に『マンガとミュージアムが会おうとき』（共著、臨川書店、2009年）、『差別と向き合うマンガたち』（共著、臨川書店、2007年）など。

杉本バウエンス・ジェシカ（すぎもとばうえんす じぇしか）

専門はカルチュラル・スタディーズ、ビジュアルカルチャー研究、とりわけ女性向けのコミックスとマンガの研究。ベルギー出身。大阪大学大学院人間研究科博士課程修了、博士（人間科学）。京都精華大学マンガ学部、同国際マンガ研究センターでの勤務を経て、現在、龍谷大学国際学部国際文化学科准教授。好きなマンガはボーイズラブ全般、あしべゆうほ『クリスタル☆ドラゴン』（秋田書店）、坂本眞一『イノサン』（集英社）。

竹内美帆（たけうち みほ）

専門はマンガ研究、美術教育。京都精華大学大学院マンガ研究科博士後期課程修了、博士（芸術学）。ライプツィヒ大学客員研究員（2013年10月～2014年3月）を経て、現在、北九州市立大学・筑紫女学園大学非常勤講師。主著に、「線から捉えなおす「劇画」さいとう・たかをを中心に」（ジャクリーヌ・ベルント他編『国際マンガ研究3：日韓漫画研究』京都精華大学国際マンガ研究センター、2013年）など。好きなマンガは福本伸行のマンガ（特に『銀と金』）。大学1年生の時にジャクリーヌ・ベルント氏の授業を受けマンガ研究に興味を持つ。

鶴田裕貴（つるた ゆうき）

専門はマンガ研究、表象文化論。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論分野修士課程修了。現在、同博士後期課程在籍。主な業績として、「「クレイジー・キルト」におけるモダニズム絵画の影響——コミック・ストリップはアーモリー・ショウにいかに関与したか」（口頭発表、日本マンガ学会第19回大会、2019年）などがある。最近は、模造クリスタル『金魚王国の崩壊』（<http://www.goldfishkingdom.client.jp>）の更新再開と、尾籠憲一『胎界主』（<http://www.taikaisyu.com>）第3部の開始によって、WEBマンガへの興味が再燃している。

西原麻里（にしはら まり）

専門はマンガ研究、社会学、メディア研究（ポピュラー文化研究）。同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻博士後期課程退学、博士（メディア学）。現在、愛知学泉大学家政学部家政学専攻講師、文化庁メディア芸術祭実行委員会選考委員。主な業績として、『マンガ文化55のキーワード』（共編著、ミネルヴァ書房、2016年）などがある。今好きなマンガは、池辺葵『プリンセスメゾン』（小学館）、九井諒子『ダンジョン飯』（エンターブレイン）、ヤマシタトモコ『違国日記』（祥伝社）。ライフワークはボーイズラブ。

吉村和真（よしむら かずま）

専門は思想史、マンガ研究。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学、修士（文学）。現在、京都精華大学マンガ学部教授。2001年の日本マンガ学会設立や2006年の京都国際マンガミュージアム開館など、マンガ研究の環境整備と社会展開を推進してきた。文化庁事業ではメディア芸術領域の複数役職を務める。愛読マンガ雑誌はガイドワークス発行の「パチスロパニック7」シリーズ。近著に『障害のある人たちに向けたLLマンガへの招待——はたして「マンガはわかりやすい」のか』（共著編、樹村房、2018年）などがある。

メディア芸術・研究マッピング
マンガ研究の手引き

監修 …………… 吉村和真

編著者 …………… 石川優

著者 …………… イトウユウ
表智之
杉本バウエンス・ジェシカ
竹内美帆
鶴田裕貴
西原麻里
吉村和真

表紙デザイン担当 … 大岩雄典

本文デザイン担当 … 水谷愛・田中真弓(aibond)

発行者 …………… 文化庁

発行日 …………… 2020年2月16日 第1版
2020年3月16日 第2版

本冊子は、文化庁の委託業務として、メディア芸術コンソーシアムJV事務局が実施した2019年度「メディア芸術連携促進事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。転載複製等に関するお問合せは、文化庁に御連絡ください。